

教育実践報告

学部教育におけるオンラインでの音楽指導の試み

安藤 江里

An Activity Report on an Attempt to Engage in Online Music Instruction in
Undergraduate Courses

ANDO Eri

要 旨

2020年度の大学の講義のほとんどが新型コロナウイルス感染症対策のため遠隔(オンライン)で行われた。当初音楽については参集して歌うことが好ましくないとされ閉講も考えられたが、様々な工夫を凝らしオンライン授業に踏み切った。具体的な指導実践内容として①音楽の基礎知識(楽典)の指導、②歌唱の指導、③音楽づくりの指導、④鑑賞の指導、⑤器楽の指導、⑥模擬授業の指導、に分けて成果と課題について考察した。またオンラインにおける新たな教材開発の可能性と、評価など全体的な課題についても言及した。

キーワード

オンライン 音楽 教材開発 評価

目 次

I. はじめに

II. 指導実践の内容

III. 考察

IV. おわりに

参考文献およびCD

I. はじめに

2020年度の大学における講義演習などは、新型コロナウイルス感染症対策の影響で急遽オンラインによる遠隔で行われた。当初、音楽のような実技を伴う演習はオンラインでは難しいと考えられたが、何とか工夫を凝らし実施に踏み切った。松本大学ではMicrosoft Teamsを利用した双方向ライブ配信型を基本としたが、他大学ではオンデマンド型の授業も多くみられた。本稿では松本大学において実践した「音楽(歌唱)」、「音楽の歴史と鑑賞」の授業内容と指導法を中心に報告する。

II. 指導実践の内容

「音楽(歌唱)」は教育学部の1年生を対象とした専門基礎科目であり、音楽の基礎的な楽典の知識や読譜力を養い、リズム唱や歌唱を通してリズム感や音感を体験的に身に付け、豊かな音楽表現を目指す。本来の対面授業であれば、協働的な音楽活動の楽しさを味わうことが目標の一つとなるが、オンラインではアンサンブルが不可能なため、一部内容を変更し、各自で歌う活動とグループによる音楽づくりの活動、そして歌唱共通教材に関連した鑑賞を取り入れた。

一方「音楽の歴史と鑑賞」は全学部の3・4年生を対象とした教養科目であり、西洋音楽史を中心にどのように音楽文化が発展してきたのかを、各会のテーマに沿って解説し、楽曲や演目を鑑賞していく。対面では実際の楽器に触れたり演奏したりできるのだが、オンラインではパワーポイントの資料を参考にワークシートで理解を深め、実際の楽曲を鑑賞した感想などをまとめた。また課題として各自の興味ある作曲家について調べて作曲家新聞を作成した。

これらの講義とゼミ、他大学で行った器楽の指導を含め、次の6つの音楽学習のカテゴリーに分けて具体的な実践内容と指導法について述べる。

1. 音楽の基礎知識(楽典)の指導

毎年のことであるが、音楽という教科の特性から高校までの音楽経験の差が大きく、音楽の基礎知識は特別な音楽経験を積んでいない限り、基本的に身

に付いていないのが現状である。事前アンケートからも約半数が高校で音楽を履修しておらず、音楽の授業は中学校以来であり、合唱やリコーダー演奏の経験はあるものの、楽譜を読める学生は少ない。学校教育における音楽科では実技が中心なため、音楽を履修していても楽典の知識や音楽史についてはほとんど学習されていない。

そのため、毎年楽典のワークシートに沿って、改めてドレミの読み方から始めている。今年度は事前に作成したワークシートやリズム課題などの教材を冊子にまとめて教科書などと一緒に発送した(図1)。また自宅や下宿先に鍵盤楽器がない学生のために紙鍵盤(図2)も同封した。実際音で確かめたい場合はタブレットなどの無料鍵盤アプリ(図3)も活用できることを示した。学生は手元に歌集と教材冊子、鍵盤図などを準備してTeamsに参加し、パワーポイントの資料を見ながら学習した。

五線譜の基礎、ト音記号の書き方、音名と階名、全音と半音、シャープ(♯)やフラット(b)・ナチュラル(n)などの変化記号、音符・休符の名称と音価、



図1. 自作の教材冊子

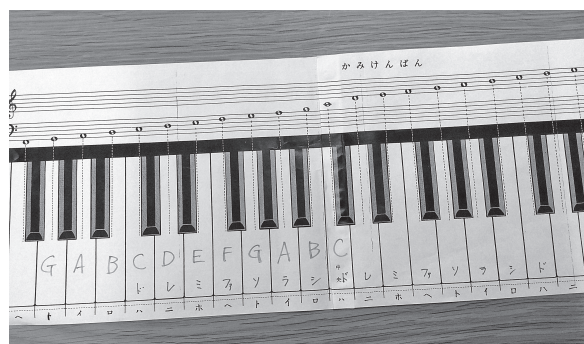


図2. 紙鍵盤

拍子、強弱・速度記号、長音階の仕組みと調号、ハ長調の音階と主要三和音、コードネーム、日本の音階、ヘ音記号の読み方など、音楽の理論にはいろいろときまりがあり複雑である。これらの知識がなくても耳に入った音を模倣して歌ったり楽器操作を覚えて演奏したりすることが可能である。児童や生徒にとっては、少ない音楽の時間で机上の難しい理論の学習よりも実際の演奏の方が楽しいのは当然である。しかし、教育学部の専門科目として基礎知識を習得しておくことは必要と考える。指導者として児童の前に立つ限り、知らないでは済まされないし、これらの知識と仕組みを理解すれば、自分で楽譜が読めるようになり、指導の上でも表現の幅も広がるからである。

上記の内容について、毎回の授業の30分程度を使い、対面ではホワイトボードで説明していたが、今年度はワークシートに沿ったパワーポイント資料(図4)を作成して画面共有しながら進めていった。学生には音声やチャットで回答してもらい答え合わせができるよう配慮した。また授業後も個人チャットな



図3. 鍵盤アプリ

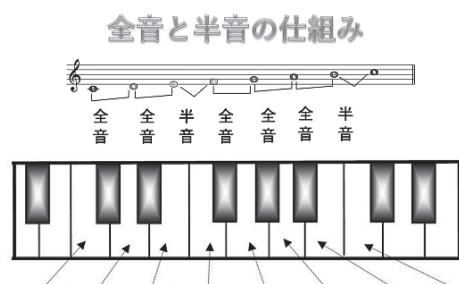


図4. 楽典解説用PPT資料例

どで質問を受け付け対応した。授業終了後、大学への登校日に冊子を集めて実物を目視でチェックした。ほとんどの学生が解説を聞きながらメモを取り課題をこなしていたが、やはり主要三和音とコードネームの理解が難しいことや五線に音符を書くことに不慣れた学生が多くみられた。学生の反応としては、音楽に不慣れた学生にとっては楽典の話は難しかったが一から教えてもらってよかった、またピアノなど経験がある学生も忘れていたことを思い出せ復習ができた、改めて理解が深まった、などの感想が寄せられた。

2. 歌唱(リズム唱・階名唱)の指導

毎回授業の始めにリクエスト唱として何曲か歌うのだが、オンラインで学生側のマイクをオンにするとハウリングが生じ、聴きにくくまた歌いにくくなるため、全員マイクをオフにしたまま行った。従って教師が伴奏するピアノの音と声を聴きながら各自が声を合わせるに留まった。他者の声は聴こえず一体感には欠けるのだが、それぞれのペースで参加することとした。学生からもリクエスト曲を募ると、チャットに示された楽曲にいいね！マークが追加されていく。歌集「歌はともだち」(教育芸術社)¹⁾には子どもが好む様々な歌や、歌唱共通教材、合唱曲、遊び歌などがあり、知らない曲も時々はあるが、ほとんどが聴いたり歌ったりしたことのある楽曲である。リクエスト歌唱は大抵一度歌っておしまいなのだが、特に「Smile Again」は2つのパートに分かれてそれぞれ音を取って何度か歌った(図5)。授業後の感想ではほとんどの学生からリクエスト唱が思い



図5. 歌集から

のほか好評であった。仲間と声を合わせられたらよりよいのは当然だが、懐かしさが一気にあふれた、周りの声を気にせず歌えた、合唱曲では教師の声とハモることができた、などの感想が寄せられた。

この歌集を見て歌う目的は、上記のような様々なジャンルの歌に触れることと同時に、楽譜というものから様々な情報を読み取るきっかけを作ることである。楽譜を読める学生が少ないことは述べたが、小中学校の音楽学習の中で読譜は重視されていないのが現状であろう。合唱の音取りもピアノが弾ける生徒が音を取り、それを聴いて耳で覚えることには慣れている。今は便利なパート別の音源データを使用することもできる。従って楽譜が読めなくてもそれほど困らない。しかし楽譜を見ると、音高やリズム、何拍子の楽曲なのか、楽曲がどのように進むのか、繰り返し記号やD.C(ダ・カーボ)、D.S(ダル・セーニョ)記号、強弱や速度記号も認識することができるのである。

次に音符の基礎知識とともにリズム練習を行った。まずは音符の名称と音価を示し(図6)、リズムの読み方をタンタンタタタタのように単純なリズムパターンから練習していき、付点音符やシンコペーションなどの特徴的なリズムパターンの課題に進んだ(図7)。同時に拍子にも触れ、理論と実践を結び付けていく。30あるリズム課題から一つ選び録音して提出させ、一人ひとりの理解度や技能をチェックしフィードバックを行った。

階名唱の指導は小学校学習指導要領にある歌唱共通教材を用いて行った。歌唱共通教材の存在を知らない学生も多いため、リストを挙げ各学年4曲ずつあることを示し、前期の授業では1～3学年の教材を中心に扱った。

楽譜が読めない学生はドレミの仮名を振る傾向が

音符の名称と音価

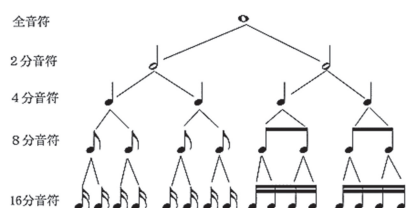


図6. 音符の名称と音価

あるが、できれば仮名を振らずに五線の位置で少しずつ慣れていけるように助言した。1年生の「ひのまる」は「ドドレレミミレ」のように隣り合った順次進行が多いので導入として扱うのによい。「春の小川」もリズムが単純で同じ旋律が繰り返されるためよい練習になる。CDを聴いたり範唱を繰り返したりしながら歌唱共通教材を歌えるようになった。学生にはリズム唱、階名唱、歌詞唱をそれぞれ録音して提出してもらった。各自のデバイスにあるボイスレコーダーやボイスメモ機能を使い、Teamsの課題に添付する。学生によっては動画や楽器を用いるなど工夫しており、他人に聴かれず録音できるのでやりやすかったようである。対面ではなかなか一人ひとりの技能をチェックする時間が持てなかったが、オンラインによって課題をチェックすることで評価が明確にできた。

3. 音楽づくりの指導

通常の対面授業ではグループでリズムアンサンブルや楽曲表現としての音楽づくりの活動を行うが、今回はオンライン上で何ができるか苦慮した。楽器もない状態であったため、今回はわらべうたを教材として、言葉遊びの替え歌を創ることを試みた。わ

リズム練習(2)

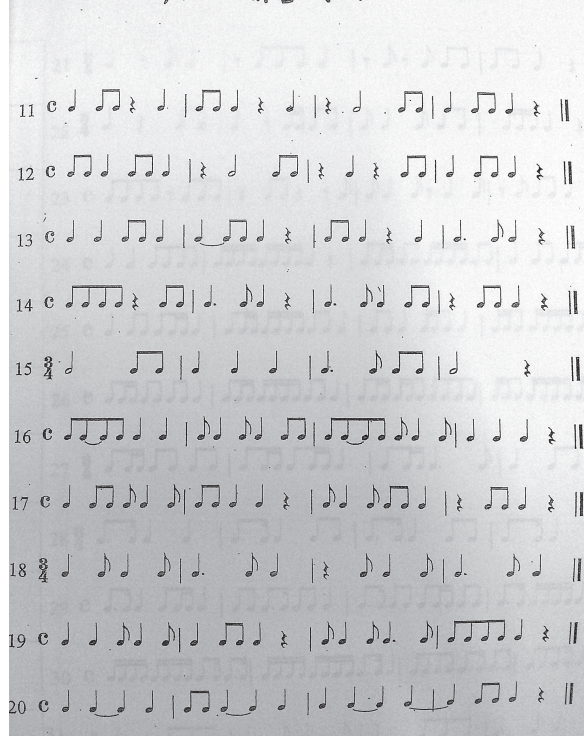


図7. リズム課題より

らべうたについては例年各自が自分の体験や家族にインタビューして発表しあい、皆で遊びを共有している。今年もオンライン上で発表し、簡単な手遊びの見本を見せたり動画などを共有したり、絵描き歌も画面共有で実際描いてみたりした。様々な遊びがあることを改めて認識し、わらべうたの定義や特徴、歴史的背景、地域性など多様であることを学んだ。

1年生は入学以来一度だけ登校してゼミメンバーと顔合わせはしているが、それほどまだ親しくなれていないようであった。そこでゼミごとのチャンネルを作り、各ゼミに分かれて「いろはにこんぺいとう」(図8)の替え歌づくりを行った。

これは、こんぺいとうは○○○、○○○は△△△、というように連想してつなげていく言葉遊びのわらべ歌である。限られた拍に言葉をあてはめていき、最後はオチを付けたりするのだが、始まりだけ統一して各ゼミで自由に創作し発表した。以下は発表内容例である。

「こんぺいとうは→あまい→ばなな→きいろ→れもん→すっぱい→うめぼし→あかい→たいよう→まぶしい→でんき→ひかる→おやじのはげあたま」のように最後のオチを合わせてきたものや、「こんぺいとうは→小さい→ボール→投げる→野球→楽しい→勉強→学校→ランドセル→ピッカピカの1年生」のように教育学部生らしい発想のものもあった。

このように自由な発想を出し合い、ゼミメンバーと対話しながら替え歌の楽しさを味わい協働的な活動ができた。すべてのゼミが発表し、似ているようで少しずつ違う替え歌を共有しあうことも楽しかった。そして多くの学生がゼミのメンバーと画面越しではあるが対話を通して協働する喜びと距離が縮まったことを感じ、他のゼミの発表を興味深く聴いたと記述していた。

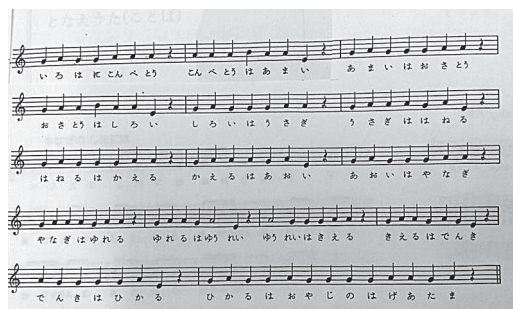


図8. いろはにこんぺいとう

4. 鑑賞の指導

音楽(歌唱)では歌唱共通教材の「ふるさと」を題材に比較鑑賞を行った。まず文部省唱歌「ふるさと」の合唱バージョンを聴く。これは誰もが親しみを感じる日本の代表的な楽曲である。特に作詞の高野辰之は信州の出身であり、歌詞に出てくる山や川の風景は容易に目に浮かぶ。明治末期から大正にかけて編纂された文部省唱歌のため時代はやや古いが、ゆったりとした4分の3拍子で歌いやすい穏やかな旋律のため、これからも歌い継がれていくであろう。

学生ももちろん知っており何度も歌ってきた楽曲であるが、小学生の頃に歌詞を覚えて何となく歌っていた感覚と現在は違うようだ。大学生になり親を離れて生活を始めた学生も多く、将来の目標に向かって歩み始めた境遇は歌詞の内容と重なる部分もあり、自分の故郷で待つ両親や友を思う気持ちにも共感できる。改めて歌詞をかみしめて鑑賞することで楽曲を深く受容すると共に新たな感覚が生まれたと考えられる。

次にこの「ふるさと」の旋律を雅楽の楽器である箏で演奏したものを比較鑑賞した。これは元宮内庁学部所属、雅楽師の東儀秀樹氏が様々な西洋楽器とのコラボレーションを試みたCDに収録されており(図9)²⁾、同じ旋律とは思えない程、異なる世界観を彷彿とさせる。箏という楽器はダブルリードの管楽器であり、西洋楽器のオーボエと似た構造を持つ。学生にはまず楽曲を聴いてもらい、楽器や演奏者の紹介をした。そして感想や湧いてきたイメージを絵や言葉で表現してもらった。



図9. 「TOGISM 2」と箏

学生の記述は、何世紀もタイムスリップした気持ちになった、平安時代あたりの景色が浮かんできた、音程は同じなのに音色が違っただけで印象が全く違う、歌詞がないため故郷への様々な思い出がよみがえってくる、などであった。

最後に小山薫堂作詞、youth case作曲、桜田直子編曲の「ふるさと」(同声二部合唱)を鑑賞した。これは2013年度NHK全国学校音楽コンクールの小学校の部の課題曲であり、元々2010年以来人気グループ「嵐」が紅白歌合戦で歌っていたこともあり、当時小学生だった学生には馴染みがある。現代版ふるさとの内容は、いわゆる田舎であろうと都会であろうと、その人が育った場所から前を向いて生きていく応援ソングのようだ。旋律は意外にも音域が広く音がたくさん詰まっている感じだが、ポップス調であるため気持ちは乗りやすい。

3曲の「ふるさと」を鑑賞した上で、一番気に入った曲とその理由を書いてもらった。やはり現代版「ふるさと」が馴染み深いと答えた学生が半数近く、次いで文部省唱歌の「ふるさと」、そして筆策による独特な演奏を気に入った学生も十数名いた。楽曲には歌詞、旋律、音色、リズム、構成などによってそれぞれの良さがあり、その時の自分の置かれた状態や感情によっても感じ方が違う。作詞者、作曲者、演奏者の意図も汲み取りながら自分が楽曲と向き合い価値づけてしていけるのが鑑賞の醍醐味である。

鑑賞は音楽活動の中では受動的になりやすいとの指摘があるが、比較聴取を用いたり楽曲を聴く観点を示して文章や絵で表現したりすることは主体的に楽曲と関わることになるため、オンラインでも十分に行える指導と言えよう。

「音楽の歴史と鑑賞」では、音楽史に沿った文化発展の流れを解説し具体的な楽曲を鑑賞していくため、オンライン授業に比較的向いている内容であった。一般的に高校までの音楽教育において、音楽史や文化理解につながる視点での鑑賞学習がほとんど行われていないのが現状である。ベートーヴェンやモーツァルトの名前と有名な楽曲の一部分を聴いたことがある程度である。多少楽曲の背景にも触れるはずではあるが、より楽曲の構造や仕組みなど音楽の要素と曲想の関係に重点が置かれていると思われる。そのため文化理解については社会の歴史で時代ごと所々出てくるが、学生の中ではつながって認識

されていないのである。

そこで学生には高等学校の教科書などを参考に^{3), 4)}、毎回前もってテーマごとのワークシート(図10)と対応したパワーポイント資料(図11)を作成して提示し、講義時間で資料を画面共有して時代背景や作曲家及

音楽の歴史と鑑賞 第5回 ワークシート

「ロマン派の音楽」

詩と音楽～ドイツリート(歌曲)～

- ・ロマン派独特の音楽として、ドイツ文学と音楽の結びつきによるリート(芸術歌曲)が挙げられる。ゲーテ、シラー、ハイネといった詩人たちによって優れた詩が多く生み出され、表情豊かで繊細な旋律とピアノ伴奏による内面の表現が一体となってロマン主義の精神と結びつき、一時代を築く。
- ・それまでの伝統的な**有節歌曲**(各節に同じ旋律が付けられたもの)だけでなく、**通作歌曲**(各節に異なる旋律が付けられたもの)、また物語や内容に連続性のある詩を基に複数の歌曲からなる**「連作歌曲」**などがある。その後ピアノ伴奏ではなくオーケストラ伴奏に発展する。
- ・F.シューベルト(1797-1828)・・・オーストリア、ウィーン生まれの作曲家。友人たちから経済的援助を受けて活動し、彼らに囲まれて行う演奏会は「シューベルトティアード」と呼ばれ、アマチュアの市民音楽家たちが楽しんでいた。交響曲や器楽曲のほか、短い生涯に600曲を超えるリートを残した。

図10. ワークシート例

F.シューベルト(1797-1828)

オーストリア、ウィーン生まれの作曲家。友人たちから経済的援助を受けて活動し、彼らに囲まれて行う演奏会は「シューベルトティアード」と呼ばれ、アマチュアの市民音楽家たちが楽しんでいた。交響曲や器楽曲のほか、短い生涯に600曲を超えるリートを残した。



♪「冬の旅」「美しき水車小屋の娘」「白鳥」「野ばら」「魔王」

ルイ14世(1638-1715)はバレエに熱中し、創作にも力を注いだ。彼の「太陽王」という異名も「夜のバレエ」で太陽王の役を踊ったことに由来する。1661年、王立舞踏アカデミーを設立し、プロの舞踏家を養成するなど、バレエをヨーロッパに広めた。



宮廷文化の衰退に伴い、バレエはオペラと一体化して劇場(オペラ座)に移り、職業ダンサーが台頭する。それまで男性中心であったが、女性ダンサーがデビューした。

図11. PPT資料例 5回目(上)8回目(下)

び楽曲の解説を行い、鑑賞してもらった。学生に配布するワークシートの■部分は空白になっており、資料を見ながら自分で埋めていく作業をしてもらい、毎回授業で聴いた楽曲の感想を記入して課題提出してもらった。

また時間内に鑑賞できる楽曲は限られるため、各自が空き時間に興味関心のある楽曲を鑑賞できるよう情報提供をした。音源はCD、DVDのほか、インターネット上のYouTubeなどから引用した。講義は補講(自習)を含め14回分行き、各回のテーマと鑑賞楽曲は表1のとおりである。

学生の記述としては、「この講義を通して著名な作曲家や沢山の名曲に触れることで、基礎教養としての音楽を深めることにも大いに役立ったことや、今までにはなかった視点での音楽鑑賞をすることになり、様々な音楽を実際に聞いてみて多くのことを感じ取ることで、音楽への感じ方を増やすことができるきっかけとなった。」「このように音楽を学ぶことは中学校以来しばらくしていなかったので毎回とても興味深かった。」「時代ごとの生活様式、文化などに影響され音楽そのものが持つ意味が様々であることがわかった。また、時代は同じでも国や地域が異なれば当然のことながら生活様式や文化、社会情勢なども様々であり、時代が同じだからといって世

界共通で同じ音楽に親しんでいたわけではないということもわかった。そして、音楽にはただ曲を聴いているだけではなかなか見えてこない作曲者の人生観やその時その時の音楽に対する思いを知り、聴いたことのある楽曲でもこれまでとはまた異なる視点や思いで捉えることができた。」など、これまでの音楽の聴き方や捉え方に変化が生じてきたようである。これまでに音楽史や文化の発展について学ぶ機会のなかった学生にとって、ドラマや映画、CMなどで聴いたことがあるフレーズが実はこの作曲家のこの楽曲だったんだ、という発見の喜びが毎回多く寄せられ、いかに日ごろ聴く楽曲のジャンルに偏りがあるかが明らかであった。しかしこの講義を通して、クラシックは何だか古くさくて堅苦しいもの、といった印象を持った学生は嬉しいことに皆無であり、ほとんどの学生が一回一回の講義を興味深く受け止め自分自身の中に新たな知識を増やし感じるものがあつたのだと思われる。このような文化理解は人の感性を豊かにし、その後の人生にも大いに役立つと思われる。オンラインという画面越しではあったが、これをきっかけにLIVEや本物に触れる機会を求めさらに探求していったほしい。

表1 テーマ設定と鑑賞楽曲

回	テーマ	鑑賞楽曲
1	音楽の始まり	セイキロスの碑文 グレゴリオ聖歌 皇帝マルチェルスのみサ〜キリエ 他
2	バロックの音楽	調和の靈感 メサイヤ カノン 音楽の捧げもの フーガ短調 G線上のアリア 他
3	ウィーン古典派	弦楽四重奏「ひばり」 アイネ・クライネ・ナハト・ムジーク ホルン協奏曲
4	交響曲など	ベートーヴェンの交響曲やピアノソナタ
5	ロマン派〜歌曲	野ばら 詩人の恋 五月の夜 ます
6	ロマン派〜器楽	結婚行進曲 幻想交響曲 ラ・カンパネラ 交響詩 ショパンのピアノ曲
7	オペラ	トゥーランドット 魔笛 トリスタンとイゾルデ
8	バレエ音楽	映画「太陽王」 眠れる森の美女 瀕死の白鳥 ボレロ
9	国民楽派	韃靼人の踊り 展覧会の絵 シェヘラザード フィンランディア 威風堂々 惑星〜金星
10	印象派の音楽	交響曲第3番「オルガン」 夢のあとに 月の光 海 ジムノペディ
11	20世紀・アメリカ	月に憑かれたピエロ セントルイスブルース What a Wonderful World ラブソディインブルー
12	日本の伝統音楽	雅楽「陵王」「納曽利」「越天楽」 催馬楽「伊勢海」 能「羽衣」
13	歌舞伎と文楽	地歌「雪」 文楽「妹背山婦庭訓」 歌舞伎「京鹿子娘道成寺」
14	明治以降の日本	花 荒城の月 この道 ノヴェンバー・ステップス 戦場のメリークリスマス

5. 器楽(ピアノ)の実技指導

音楽のオンライン授業で苦労したのはピアノなど器楽の実技指導であった。松本大学では後期に予定されている器楽指導だが、ここではT大学で前期に行ったピアノレッスンについて触れておく。

学生に前もってアンケートを実施したところ、半数の学生がピアノなどの鍵盤楽器を所持していなかった。対面では通常一人一台宛がわれてピアノの技能を習得してきたため、今年度は楽器がないことは致命傷であった。それほど高くないキーボードを購入した学生もいたが、下宿先のアパートでは音を出せない環境下で、最後まで紙鍵盤やタブレットのアプリで頑張る学生もいた。教育学部の初等教員養成課程の学生としては、やはり学習指導要領における歌唱共通教材の中から数曲は弾けるようになってほしいものであるが、ピアノを全く経験したことがない学生にとって楽器もない状態で本当に学習できるのか、非常に不安を抱えてのスタートであった。

授業は基本的にTeamsで行い、課題目標に向けて各自が練習し、一人ひとり個人レッスンのチャンネルに移動して対応した。時間内に全員のレッスンをすることは厳しく、一人2〜3分であったが、修正すべき指示を端的に伝え、あとは各自で練習して完成したものを録画に撮り、個人チャットに添付してもらった。従って授業時間外にそれらの録音や動画(図12)をチェックし、次の課題を指示していった。対面であれば音やリズムの間違いをその場で音を示せるが、言葉のみで説明しながらの指示は大変であった。紙鍵盤の学生には手の位置や指の動きを確認す



図12. 提出動画

るにとどまった。ほかの楽器演奏の経験があり楽曲の旋律が何となくイメージできる場合はよいのだが、特に初心者にはイメージしづらいため、指導者がゆっくり片手ずつ弾いた動画をアップし、音を聴いて確認しながら練習できるよう配慮した。それでも音が鳴らない状態ではやりづらかったようだ。

緊急事態宣言が解除され7月より実習など一部の対面授業が可能となった。急遽学生にも希望調査を取り、対面希望の学生には大学でレッスンを行った。特に楽器を所持していない学生で大学に来れる学生は意欲的に参加した。それでも地方から上京することに抵抗があるなど、それぞれの事情でオンライン授業を継続した学生も多かった。大学の楽器で練習できた学生は、やっと感覚をつかめたようで、やはり器楽指導については環境を整える必要があり、課題が残った。

本来であれば最後は全員で発表会を行う予定であったが、ベストな状況で演奏できない学生もいたため、今年度は各自が録音を提出して終わることとなった。

6. 模擬授業の指導

教職研究ゼミナールでは、3年生のゼミ生6名が音楽科の小学校学習指導要領解説⁵⁾を分担してまとめたものを発表しあい、一人ずつ模擬授業をオンライン上で行った。それぞれが設定した題材は「リズムで遊ぼう」(1年生)、「様子を思い浮かべて歌おう」(2年生)、「せいかつの中にある音を楽しもう」(2年生)、「いろいろな音のひびきをかんじとろう」(3年生)、「思い出を音楽にしよう」(6年生)、「拍にのってリズムをうとう」(特別支援学級低学年)であり、指導案を提示して20分から30分をかけて行った。「かたつむり」や「虫の声」「おかしのすきなまほうつかい」といった教科書に載っている楽曲を教材としたリズムや歌唱表現に関連するもの、身の回りにあるものの音や思い出とリンクさせたイメージによる音楽づくりのもの、そして特別支援学級を想定し児童一人ひとりの実態に即した様々な支援ツールを使用して音楽を楽しむものなど、バラエティに富んだ内容で互いに良い刺激となった。

オンライン上で示せる音源や動画、ワークシートやパワーポイントによる資料(図13)も充実していた。

学生を児童に見立てて行ったのだが、やはり画面越しに話しかけてもなかなかすぐに反応が返ってこないためお互いやりづらかったのは致し方ない。しかし教育実習を控えた3年生にとって模擬授業を行う機会がなく、少しは役立ったと思われる。各模擬授業後に振り返りの時間を設け、互いの立場で評価しあい改善につなげられる学びがあった。幸い小中学校では感染対策をしながらの対面授業が行われているので、児童と一緒に創り上げる授業を体験してきてほしい。

オンラインによる授業づくりでは目的、指導内容に沿った指導方法として、様々なICTツールを活用することが考えられる。デジタル教科書やデジタル教材のほか、特に音楽づくりの活動では教育版のボーカロイドも開発され、スマートフォンやタブレットでのアプリも充実している。またこれからの教育

に欠かせないと言われるプログラミング的思考力だが、スクラッチのようにブロックを積み上げて様々な指示を組み込むタイプのMusic Blocksを活用して音楽づくりの授業デザインを試みた学生もいた(図14)。

児童や生徒がこのようなツールを用いて自分のイメージを音で表現しようと音楽にのめりこむ姿が目につく。このような教材開発と実践も行われつつあるので、その効果と課題をしっかりと分析しつつ可能性を探っていきたい。

7. その他

最後にゼミ活動の一環として行ったコンサートに触れておく。例年教育学部ではサマーコンサートを企画して参加希望者による演奏を聴く機会を設けてきたが、今年度はオンラインで開催することとした。出演者を募るために以下のようなアナウンスをTeamsで提示した(図15)。

演奏希望者は個人やグループでエントリーし、演奏動画を撮影して送ってもらった。ゼミ生6名は参加できないため、「上を向いて歩こう」の伴奏に合

私の 周りの 音を こえて あらわしてみよう。

2年 組 音楽 名前

やってみよう！

私の 周りで きこえる 音や なきこえを
こえて あらわしてみよう

【なきこえ】

♪

♪

【のりものの 音】

♪

♪

【しぜん の 音】

♪

♪

【いえ の 中で きこえる 音】

♪

♪



図13. 学生が作成したWSとPPT

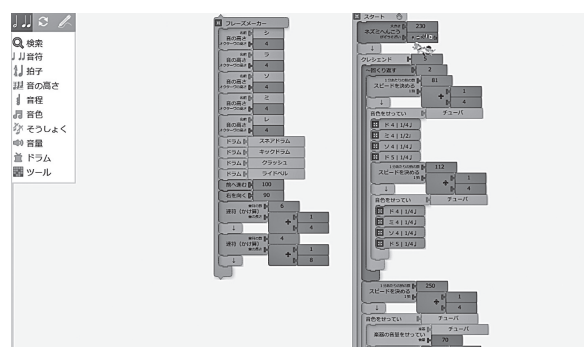


図14. Music Blocks

サマーコンサートの開催について（安藤ゼミ）

こんにちは！安藤ゼミです。
私たちのゼミではサマーコンサートの開催を予定しています。
詳細は以下の通りです。

配信日時 : 8月上旬
送信締め切り : 7月24日

沢山の参加お待ちしております！
詳しいことはeri.ando@t.matsu.ac.jpまで



図15. コンサート案内

わせて各自が好きな楽器や歌で演奏動画を撮り、リモート演奏をしているように編集した。ほかにも感染予防対策としてアクリル板を挟んでの連弾、できるだけ離れてマスクをつけた演奏など、本来のアンサンブルの環境とは大きく違っていたが、今できることを試みた。

最後に集まった動画を一本のサマーコンサートとしてまとめStreamで限定配信した。限定配信とはいえ、出場者の肖像権や著作権の確認を行いつつ、何とか出来上がった。編集や様々な手続きで時期は遅れてしまったが、一つの試みとして学生にとっても良い経験となり、一定の成果はあったと考える。

音楽や演劇など集客して行うライブも制限されるコロナ禍ではあるが、そういう時だからこそ人々の心がつながって豊かになる芸術表現の場を模索していかなければならないと思う。

Ⅲ. 考察

ここまで前期のオンライン授業実践における内容と指導法について報告した。音楽学習は大きく演奏などの表現と鑑賞に分かれるが、さらに①音楽の基礎知識(楽典)の指導、②歌唱の指導、③音楽づくりの指導、④鑑賞の指導、⑤器楽の指導、⑥模擬授業の指導に分けて述べてきた。それぞれのオンライン授業における利点と課題を考察する。

まず音楽の基礎知識である楽典の指導は、基本的に机上の学習で可能であり、補助的に音が鳴る鍵盤があればより理解しやすい。そのためワークシートとパワーポイント資料の提示によってオンラインでも十分可能である。しかし学生の反応や学習実態が把握できないため、最後に教材冊子を集めて確認する必要があった。学生にとっては初めての学習内容もあるため、理解が難しかったと思われる。また五線に音符を書くことも良い経験となった。修正などを指示して返却したが、その後は訂正したページの写真をチャットに添付することで確認した。学生からも質問などを受け付けたが、個人とのやり取りができるため、対面ではしにくい質問も気軽にできる利点がある。またやり取りの履歴が残るため、顔が見えないことは残念であるが、学生個々の状況把握には役立った。

歌唱の指導については、この授業のメインになる

にもかかわらず全体で声を合わせることができないという大きなリスクがあった。しかし指導者の伴奏に合わせて個々で歌うことができていたことを知り、大変救われた。歌う際に手遊びや手話などの動作を取り入れることで、より楽しく一緒に歌っている感覚を持てる。わらべうたや歌唱共通教材についても学ぶことは多く、楽典の学習と関連付けながら進めることができた。今回実践しなかったが、指揮法の指導も取り入れてもよかったと思われる。

またリズム唱、階名唱、歌詞唱の録音課題を提出することはオンラインならではの初めての試みであったが、学生もしっかり取り組み、一人ひとりの技能については評価がしやすかった。学生が参集できただけひ合唱をやりたいという欲求が高まっているが、動画編集などを取り入れていわゆるリモート演奏の可能性も考えられ、工夫の余地がある。

音楽づくりの指導については通常でも多様な題材が考えられるが、今回のわらべうたの替え歌では唯一グループ活動にしたことで学生には好評であった。オンラインで行う音楽づくりの活動としてはより一層の検討の余地があると思われる。例えばオンラインという環境をより生かしてICTを用いた音楽づくりの活動ができそうであることがわかった。学生はスマートフォンのアプリなどでリズムゲームや音楽づくりができるものには興味を示すため、活用していけそうであり今後の課題としたい。

鑑賞の指導については既述したとおり、オンラインでも十分に行えることが明らかであり、学生にとっても受け入れやすい。ただしこれも学生の姿が見えないことで反応をすぐにはキャッチできないため、ワークシートなどの課題を提出してもらうことで学習実態を把握することとした。本来であれば互いに感想を出し合い、対話しながら学習が深まることが理想であるが、そのような共有する場面が設定しにくいことは課題である。

最後に器楽の指導について、今回はピアノの個人レッスンの形態について述べた。楽器を演奏できる環境さえ整えば、レッスン自体はオンラインでも可能である。ただし連弾やアンサンブルは難しいため、やはりリモート演奏の編集が必要になる。今後の器楽指導は、個人の技能も高めつつ、他者の音も聴きながらの協働的な活動ができることが望ましく、オンラインでは難しいと考える。

授業づくりにおいても今回はオンライン上での模擬授業に取り組んだ。学生なりに一生懸命準備し、板書の代わりにパワーポイント資料を作成し、音源なども工夫して用いていた。音楽は一人でもできることもあるが参集してこそその意義が大きく、大変苦労していた。恐らく小学校現場がすべてオンラインになることはないかもしれないが、今後万が一そのような状況になっても、発信するすべは工夫の余地があり、他の教科にも応用していける可能性はある。今後の教材開発に期待したい。

以上、音楽のオンライン授業は対個人の学習に対してであれば可能なことが多く、むしろ音源や動画、アプリの活用でさらに応用できる可能性がある一方、複数の人が同時に協働的なアンサンブルなどの活動を行うには課題が多くあり、特に器楽は楽器などの環境設定に制限があることからオンラインでのあり方は検討の必要があることが明らかとなった。

IV. おわりに

今回のオンライン授業を通して、全体としては短時間の準備で教員も学生もよく乗り切った、というのが本音である。音楽以外でもゼミや教採対策などあらゆるタイプの授業が行われたが、学生の学びをしっかりと分析していく必要があろう。

学生の出欠席状況は、通学時間がないことが大きく自宅あるいは下宿先で参加できるため向上したと考えられる。集団が苦手な学生も周りを気にせず参加しやすかったのであろう。一方あまりにも学生の顔が見えず、学生も顔を出したがらず、表情が見えない中での実態把握の難しさを感じた。チャットにいいねマークなどで反応してもらったり、Formsを用いたクイズを出して回答してもらったり、学生の反応を引き出すことにも苦労した。

対面試験の代わりやオンデマンドなどの授業も含めて通常より課題レポートが多く、学生にとってはかなりの負担であったようである。図書館にも足を運べない学生はインターネットを頼りに課題に取り組み、慣れない作業の中、提出期限が守れなかったり操作ミスで提出できていなかったりという場面が多くみられた。習得の実態とレポートの提出状況などを加味して評価を行ったが、この妥当性については検討の余地が残った。

尚、本稿に挙げた学生の記述、作成した教材等については本人の同意及び倫理的配慮がなされている。

参考文献およびCD

- 1) 教芸音楽研究グループ, 5訂版『歌はともだち』, 教育芸術社(2015).
- 2) 東儀秀樹, CD『TOGISM2』, 東芝EMI(2000)
- 3) 新実徳英監修『Tutti 音楽 I 改訂版』, 教育出版株式会社(2018).
- 4) 久保田慶一編『音楽史を学ぶ 古代ギリシャから現代まで』, 教育芸術者(2017).
- 5) 文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 音楽編』, 東洋館出版社(2018).